

介護

の現場から

その46

私は平成20年4月からここ特別養護老人ホーム池幸園で介護支援専門員兼介護員として、その前までは居宅介護支援センターで介護支援専門員として働いていました。その両方の事業を経験して高齢者介護の難しさに出会ったのです。

自宅で生活していた高齢者が何らかの事情で在宅生活が困難になってきた。ようやく、特別養護老人ホームへの入所が



決まると家族も介護支援専門員も安住の地に到達したと思ってしまう。その後のケアを忘れてしまいます。自分もそうでした。

しかし、入所しても入所した先での毎日の生活があるのです。在宅生活同様に施設の中でもその人の生活があるのです。池幸園に入所して3年目、87歳の女性Yさんは常に帰宅願望が強くあり、願望が高じてくると「家

在宅介護から施設介護へ

池幸園主任介護員 富樫 俊子

「さ電話かけねまね!!」と介護員室にコールを押し続けたり、一人で起き上がりうろたしたり、さらに昼夜逆転し不穏な状態となったのです。家族、子どもたちに連絡を取り面会に来ていたけど、少しは落ち着きますが、帰宅願望はなかなか消えませぬ。そこでわれわれスタッフは「一度、息子さん宅へ連れて行こう」という結論に達しました。



11月9日に開催された文化祭のひとつ。ボランティアに來園していただきました。本人の努力が第一にあったと思いますが、在宅介護と施設介護がうまく連携したのではと思っています。

心の充足に応える

に表れており、ほんの一時でも心が満たされた事だと確信しました。認知症状もある方なので、翌日にはもうすでに自宅へ行ったことすら忘れていた状態でした。

また、池幸園には在宅介護を支援する事業として「ショートステイ」があります。緊急時や介護者の休養を目的として一時的に入所できるシステムです。

96歳の女性Tさんは、

1月の半分ぐらいショートステイを利用しており、数年前に脳梗塞を患ったことにより、日常生活のほとんどを自分でやっていました。昨年11月ごろ、急に足腰が立たなくなり、トイレは少し長い距離の移動に、おろか身の回りの事もできなくなりました。そこで、短い距離は自分で行う、長い距離は自分で行ってほしい。昨年11月ごろ、急に足腰が立たなくなり、トイレは少し長い距離の移動に、おろか身の回りの事もできなくなりました。そこで、短い距離は自分で行う、長い距離は自分で行ってほしい。昨年11月ごろ、急に足腰が立たなくなり、トイレは少し長い距離の移動に、おろか身の回りの事もできなくなりました。そこで、短い距離は自分で行う、長い距離は自分で行ってほしい。

本人の意向を踏まえて「立つて歩く」ことを目標にして、ショートステイを利用していただき、歩行練習を行いました。利用者には必ず訪れる終わりの日まで、生活の場として心の充足にどう応えるべきかを常に考え利用者一人一人の生活を援助していかなくてはなりません。特別養護老人ホームは、このすみか役割を持っていて、そこで働く介護者が必要とする高齢者が幸福になりたいという事、「心」が満たされることであり、それが介護に従事するわれわれの務めだと思えます。